

花魁鳥 おいらんちよう

昭和五十六年の夏、北海道東岸、浜中の霧多布（きりたつぷ）岬に家族でバードウォッチングの旅をした。

お目当ては海鳥で、我々は断崖の淵に立って見晴るかす大海原をひたすら眺めた。

無数のカモメやミズナギドリが乱舞している。

やがて、沖合いからこちらに一直線で向ってくる一羽の変変わった鳥に気がついた。崖に立つ我が目線よりやや下の高さを、大袈裟に云うと必死に、身体の割りに小さめの翼をばたつかせて飛んで来る。

一番の目当ての、エトピリカだった。

ここ霧多布小島の断崖に舞い戻るのだ。黒い身体にまるで白粉を塗ったような真っ白な顔と、鮮かなオレンジ色の大きなくちばしを持つ派手な姿、

まさに花魁鳥の異名を持つ海鳥を双眼鏡の中に捉えた。一所懸命飛ぶ姿がなんと健気でかわいことか。このように人生を懸命に生きなさいと示しているような飛び方だ。

そして、ふわっと減速して仲間の居る小島の断崖に降り立った。降り立つと、アイヌ語で美しいくちばしを意味するエトピリカを顔面の中央に派手な黄色で大きく突き出し、眼の周りを白く塗りたくったような化粧とずんぐりと黒いマントを着込んで、まるで道化の世界からやって来た滑稽でキュートな作り物のような姿となって落ち着いた。

さて彼らにとって、ここ霧多布小島と厚岸大黒島、根室ユルリ島が日本における貴重な繁殖地となっているが、餌不足や魚網被害により減少傾向が続き、現在わずかに数組のつがい程度で、もはや絶望的な危惧種となってしまうているようだ。（令和三年保護団体、日経新聞）

一方、ここ霧多布から百⁺、納沙布岬からはわずか十⁺のすぐそこにある北方領土歯舞諸島では、集団営巣地コロニーが観察されてエトピリカが群れているという。

国境問題などに何ら関係もない野鳥の存在。ふと、北朝鮮の曲「イムジン河」を思った。

